INTERVIEW

自治医科大学 最高顧問
大林勝臣先生

【プロフィール】　大林勝臣先生　昭和29年東京大学法学部卒業. 自治庁に入庁し, 京都府地方課に勤務. 昭和33年自治大学校, 昭和34年自治省行政課, 昭和36年愛媛県地方課長, 昭和38年公営企業金融公庫経理課次長, 昭和39年自治省選挙課課長補佐, 昭和45年香川県経済労働部長, 昭和46年香川県農林部長, 昭和48年総理府人事局参事官, 昭和50年自治省管理課長, 昭和51年同省選挙課長, 昭和53年同省総務課長, 昭和54年同省選挙部長, 昭和57年同省行政局長, 昭和62年自治省事務次官を歴任. 平成元年退官後, 財団法人自治総合センター理事長就任. 平成５年～14年自治医科大学理事長, 平成14年から同大最高顧問を務める.

自治医科大学の“これから”を考える

聞き手：山田隆司　公益社団法人地域医療振興協会 地域医療研究所所長

医療行政に初めてかかわって

山田隆司(聞き手)　今日は自治医科大学元理事長の大林勝臣先生をお訪ねしました.

自治医大というのは開学当時極めて異例の医科大学だったと思うのですが, 都道府県の枠組みと国の枠組み, それから医療の枠組みという中で大学という組織の運営を維持されるのは大変なご苦労があったのではないかと思います. 今回は理事長としてかかわられたころのお話や今後自治医大の進むべき方向などについてお話を伺えたらと思います.

大林勝臣　私が理事長として赴任したのは平成５年です. それまで医療行政にかかわったことがなかったので, 果たして務まるのかという不安を持っていました. 実際に大学にお邪魔していろいろお話を聞いてみると, 大変なことになっていました. まず第１に予想もしない膨大な大赤字. 第２は関連病院が倒産の危機に陥っていたこと. 第３に当時の中尾喜久学長先生から高齢のため学長交代をお願いしたいという申し入れをいただいたことです. 就任早々３つの難問題を抱えて, どう処理していこうかと悩んだものです. まずは当面の大きな問題が解決のめどがつくまで, 学長先生には２年ぐらいは頑張っていただきたいとお願いしてお聞き入れいただき, 早速処理しなければならない問題は関連病院の倒産問題です. 倒産により患者に事故でも起これば大学の権威にもかかわると思ったからです. これには附属病院, 大宮医療センターの先生方にお手伝いいただくことで何とか対応できましたが, その間の調整が大変でした. 次は附属病院と大宮医療センターの赤字の処理です. いろいろ対応策を考えた結果, 各都道府県に負担金のアップをお願いするしかないということで, 最終的に負担金の大幅なアップをお願いしました. 財政難の折から各都道府県には大変なご迷惑をおかけしましたが, おかげさまで危機を脱することができました. 次が学長交代ということで, 各方面と相談をしながら高久史麿学長に交代していただき, それで３つの問題がなんとか解決しました.

山田　病院の赤字というのは, 病院運営の問題だったのでしょうか. それとも学校法人としての大学運営の問題, 授業料収入が都道府県の負担金に頼る仕組みであったり, 卒業生をすぐに雇用できないなどの不自由さの中で, 赤字を生み出す構造だったということでしょうか？

大林　赤字のほとんどは病院部門ですね. 最も問題だったのは入院期間が長過ぎることでした. 平均在院日数が当時31日だったのですね. そのころ都内の有名大学の附属病院では21日ということでしたので10日も長かったわけです. それから, 患者さんが受診された際に先生方にはすでにブースに入っていていただかないと困るわけですが, それがきちんとできていなかった. それからもう一つ, 医療収入に対する医療経費の割合が極めて高かったということです. 結局そういうものが重なって赤字が累積してきたわけです. そこで負担金をアップしていただくのと同時に, 病院運営をビシッとやっていかないといけないということで, 歴代病院長先生にお願いをしました. 私の在任中, 長谷川嗣夫先生, 布施勝生先生がそれぞれ病院長として副院長先生方とタイアップして本当に一所懸命努力して各診療科の成績を上げてくださいました. 病院のほうの経営改善が進むと, 全体の経営がぐっと楽になりました.

山田　負担金のアップについては以前にも大変ご苦労された話をお聞きしました. 当時は卒業生が地域に出て十年そこそこだったと思うので, 社会的評価がまだ十分に確立されていたわけではなかったように思います. よくすべての都道府県が合意してくれたと当時のご苦労をお察ししますが.

大林　平成５年というと, 自治医科大学開学20周年が過ぎたころですが, 卒業生が頑張ってくれていたので各都道府県の評価はもう定着はしていたのだと思います.

山田　しかし, そういう厳しい時代を経ながらも全都道府県の枠組みがしっかりと維持され, 医師不足と言われている今, 自治医大の評価が高いというのはありがたいことですね.

大林　そうですね. 自治医科大学ができたときに, 第１期生としてあれだけの優秀な学生が集まったのは実は驚きだったのですよ, 当時は. それだけ素晴らしい理想を掲げて皆さんに集まっていただいたのだと思います.

山田　へき地医療に貢献するということが私たちにとっては医師の公職というか，プロフェッショナリズムとして分かりやすかったのだと思います．親の臑をかじらなくても医者になれるということだけでも，非常に際立った，特色が分かりやすい大学だったので，全国からみんながそういうものを目指して集まったという気がします．

大林　でも当時は工事の砂ぼこりの中で，周囲には何もない，食べるお店もない．そういうところによくぞ集まってくれたものだと思いますね(笑)．

山田　最初のころは，中尾学長のもとに高久現学長や昨年亡くなられた鴨下重彦先生など新進気鋭の先生方が集まって，非常に気合が入っていたので学生にも伝わるのですよね．先生方ともとても親しく，普通の大学では当時学生が教授室に入ることなどなかなかできなかったと思いますが，私たちは友だちのようにご自宅まで押しかけるというようなこともありました．

大林　今の教授先生の中でも，今山田先生が言われたようなことをおっしゃる方が少なくありません．当時の学生はよく自分たちの研究室に遊びに来てくれた．ところが今の学生が来てくれないのがさびしいと．

山田　そういう意味でも私たちの学生時代はとても充実していたのではないかなと思います．ただ卒業してからは，各県に分散してしまうため卒後の研修を組み立てたり自分のキャリアパスを考えるのも県によって事情が異なったりして，卒業生はいまだに苦労しているのではないかと思っています．

自治医科大学が作った地域への大きな流れ

大林　自治医科大学はやはり県から預かった学生さんの教育をして確実に医師として返さなければいけない．その作業の第一歩は医師国家試験なので，国家試験対策にも相当力が入っていました．国家試験の成績は過去33回ぐらいのうち11回が全国１位，65％ぐらいの確率で３位以内に入っています．そういう意味では地域の医師確保に大きな貢献をしてきたと思います．

しかし，これからが問題です．依然として医師不足が解消されず，危機感を持った都道府県では地域枠というものを地元大学と提携して開設するようになっており，これが定着していけば自治医科大学も今まで以上にしっかりしないといけない．

山田　自治医大は，これまでは自治省・総務省がかかわって今までにない大学としてやってきた功績が大きかったと思います．総務省，文部科学省，厚生労働省というのは，地域医療を担う医師養成という観点からは必須のトライアングルだと思うのです．そういう枠組みがあって，地域の行政と医療の問題が身近になり，現在の地域枠という発想につながっているのではないかと思うのです．もし厚労省と文科省だけが医師養成にかかわるという仕組みが続いていたら今のような流れはできなかったと思っています．

大林　そうです．地域枠の発想の原点は自治医科大学だと思います．

山田　地域が必要としているのですから，やはり地域のための医者をつくらなければいけない．あるいはそういう視点を持った医師を養成するということが，当時とても重要だったのだと思います．それが今，各県の地域枠に広がったのは当然だと思うのです．地元の大学が地元の高校生を入学させて地元で働く医師を養成する．都会に出て先端医療を目指すだけではなく，生まれ故郷の医療を守りたいんだという人たちが地元

で育つというスタイルは極めて自然だと私は思います. ただ, そういうことが今までの医学部教育の中ではあまり重視されてこなかったのですよね.

大林　そのとおりですね.

山田　今後の自治医大を考えるときにやはり２つの問題があって, 一つは今のお話のように地域枠が増える中で自治医大の存在意義をどうするのかということ, それからもう一つは卒業生と本学の関係です.

これまで自治医大が非常に重要な役割を果たしてきたこと, それからそれに追随して地域枠ができてきたことはとてもよい流れだと思いますが, 一方で今自治医大の方向性をしっかりと見定めないと自治医大が存続する理由がなくなってしまう. 地元の大学の地域枠で育てるからもういいということになりかねない. 都道府県によってはすでに卒業の時期を迎えています. 私が関係している岐阜大学では今や１学年110人のうち25人が地域枠です. 弘前大学は半数を超す人たちが地域枠なのですね. 自県出身の人が自県に残ろうという流れがついているときに, あえて何億円も出して２～３人の学生を自治医大に送り込むということについて問い直される時期がくるのではないかという危機感があります.

大林　それをどうするかというのが, 自治医科大学がこれから真剣に考えなければいけない問題です. 地元の地域枠の卒業生と自治医科大学の卒業生が一緒にへき地で働くことになった場合に, 患者サイドから見て, 自治医科大学の卒業生はここが違うんだというような人間的なものを身につける教育を徹底していく必要があります.

これは医科大学だけの問題ではありませんが, 最近の若い人に対して自己中心的だとか, 協調性に欠けるといった世間の批判をよく耳にします.

聞き手：地域医療研究所所長・「月刊地域医学」編集長　山田隆司

これは最近の流れだということで済ますわけにはいかない. いわゆる人間学というものを医師の勉強と並行して重視してほしいですね.

山田　実際に経験したわれわれにとっては, 人間学といったようなものをきちんと学んでおかないとへき地ではやっていけないという実感があります. 地域の中で「あの医者はヘンな奴だ」と言われたら周囲にもすぐに伝わります. 卒業生はそんな地域社会の厳しさを実体験として体得してきています. やはりへき地医療を目的とした大学なので, おっしゃるように人格や資質, 礼儀などを重んじる教育に力を入れるということがとても大事だと思います.

大林　私は埼玉県の浦和に住んでいるのですが, 電車の中で, 何人かの女性同士が「大宮医療センターは本当に先生も看護師さんも親切・丁寧で近所にあのセンターがあるから安心ね」と話しているのを耳にしたことが何回もあります. そういう世間話に上ること自体がきちんと地域医療を提供している証だと思います. 地域医療はなにも田舎だけのことではありませんからね.

山田　おっしゃるとおりですね.

本学と卒業生が手を携えるには

大林　まずは倫理面での教育をしっかりと進化していただかなければいけないということと，自治医大の卒業生がこれだけ評価されてくると，人間だんだん欲が出てくるものでもう少し高い診療能力を要求する傾向が出てくるかも知れません．そうなると６年間での教育の中で，地域診療の現場教育をさらに進化させる必要があります．

山田　今のお話にあった人格や資質といった問題は小さな組織のほうが培いやすいという面があります．実際自治医大では卒業生が臨床教授や臨床講師として地域での教育の橋渡しをしていますが，これは自治医大らしさをうまく活用していると思います．一方で大学病院という機能を果たしていくためには，教育機関であると同時に，高度先端医療を担うことも重要な役割です．卒業生の中にも自治医大に戻って専門的な研究を極めている人が大勢います．先端医療を担う大学病院でありながらへき地医療を経験してきた医師の割合が多いというのは，自慢できる一つのモデルではないかと思うのですが，いまひとつその特徴が活かしきれていないような気がします．

自治医大はへき地医療に貢献するという目的を持った大学なのですから，へき地医療にかかわった人たちが大学全体の組織マネージメントにもっとかかわる必要があるのではないでしょうか．今後自治医大が特色ある大学として存在を伸ばしていくためには，高度先端医療を提供する中でも，教員はへき地医療，地域医療を重要だと考えている，あるいは人格や資質の養成を重要視している，そういった特色をさらに強くすべきではないでしょうか．他の大学の地域枠というのは大学の一部分だけれど，自治医大にとって「地域」というのは大学そのもので，そもそも生まれ出た理由が「へき地医療」だったわけなので，さらに「へき地医療」が際立つ大学であるべきなのではないかと私は考えています．

卒業生がもっと大学の組織運営にもかかわれるといいと思うのですね．悪い意味での圧力としてではなく，へき地医療にかかわってきた専門家としてもっと多くの卒業生が意見が言えるような開かれた場があってもいいのではないかと，最近強く思っています．

大林　自治医科大学の中には総合医学の講座もあり，ずっと以前からの専門各科の講座もあるのですが，やはりいまだに縦割りの風潮が残っていますね．私がいたころは，救急に専門部門の協力がなかなか得られず苦労していました．

山田　大学のようなところでは自分の専門とする守備範囲をはっきり決めて，そこで力を発揮するのが医者としてはやりやすいのですね．ところが救急というのは，まだ診断名がつかずに内科か外科かも分からない状態だったり，診療科がまたがるような患者さんが多いのです．でもへき地や離島の医者にとってはその連続なのですよね．

大林　そうなのですよ．

山田　医者というのはライセンスがあって専門性のある職業なので何かと特化しがちなのかも知れません．例えば病院で診療に一所懸命専念していて，自分の病院の経営がどうなっているかとか，累積赤字がどうなっているかなどは知ったことではないという人も多いのですね．けれど専門性や診療の責任を持つのは当然ですが，病院がきちんと継続できなければ自分も職を失うわけですから，本来は全体のマネージメントをある程度理解していないと駄目だと思うのです．

大林　家のリフォームをするとよく分かります．私はいつも懇意な棟梁さんに頼むのですが棟梁さんが嘆くのですね．「自分たちは若いころから

全部を勉強してきた. 木材の扱い方, 電気・水道のことなど, 全部勉強した上でこの仕事を続けてきた. ところが最近の若いのは決まったことしかやらない.『それは私は分かりません』と言われたら使いようがない」と. なるほど, 医療の世界でも同じことが言えるなと思うのです. ですから, 専門に特化してやっていらっしゃった先生方も自治医大に来られた限りは一度地域の医療を経験していただくのが一番いいと思うのです. とはいえ, 専門を長く続けてから別の方面を勉強するというのは言うは易し行うは難しなので, 最初は浅くてもよいからあらゆる病気を診て, それを長く続けているうちに自分の得手とする一つの専門を磨くという方向に進んでいくという方がいいのではないかと思います.

山田　自治医大の教員になられた先生の中には, 自治医大という大学の特性を理解し, 卒後も大勢の卒業生とかかわりを持っているような先生もいらっしゃいます. 故 五十嵐正紘先生は東大から自治医大の小児科に来られて, そのあと北海道の厚岸の病院に赴任されて地域医療を経験され, それから地域医療学の教授として就任されました. 五十嵐先生のように自治医大に赴任されたのがきっかけでそういう道に進んだ先生もいらっしゃるので, 自治医大の教員となる方に対して自治医大の枠組みを利用して地域医療を経験できるようにしたり, へき地に赴任している卒業生のところを訪問するなどの教員用のプログラムができるといいのかも知れませんね.

大林　各県で活躍している卒業生を訪問して力づけたり, 相談にのる. 忙しいとは思いますが合間をみてそういうことをしてくださるとお互いの利益になります.

卒業生としての矜持を持って

山田　ところで, 私は今地域医療振興協会の常務理事として組織運営に関与したり, あるいは協会が運営する病院の管理者も務めていますが, 協会というのは自治医大卒業生が従事するへき地医療を支援する枠組みということで, 病院や施設運営をしながら地域を支えるというスタイルをつくってきました. 卒業生も増えてはきましたが, 一方では大学との交流も今それほど深いわけではないのですね. 地域医療振興協会が自治医大のミッションを受け継いだ形で育ってきただけに, 私としては何とか卒業生がもっと身近に交流したり, いろいろなところでお互いの長所を発揮して, 力を合わせて行ける仕組みがほしいなと思うのです.

各都道府県の支部会は現在協会の会員が中心になって運営していますが, 自治医大の同窓会のような形で一緒にやっている県も多いのですね. ですから会員資格にかかわらず, あるいは自治医大卒業生である, ないということとは関係なしに, 各都道府県ではへき地医療を担っている先生たちと力を合わせやすい形になっていますので, 大学本学, あるいはさいたま医療センターとも, 意見交流の機会を持ったり, 互いに協力する関係を強くできたらと思います.

地域医療振興協会は規模が大きくなるにつれ外部との利害関係も生まれ, 心ない人から誹謗中傷されるようなこともあるのですが, 思い起こすと大宮医療センター開設の時, あるいはそもそも自治医大開学の時もそうでしたが, 新しい勢力ができる時というのは, やはりかなりスキャンダラスにメディアに扱われたものです.

ですからわれわれも本筋を失わないように，自治医大がこの40年間これだけ高い評価を受けながら続けてこられたことを見習ってやっていかなくてはいけないと思っています．

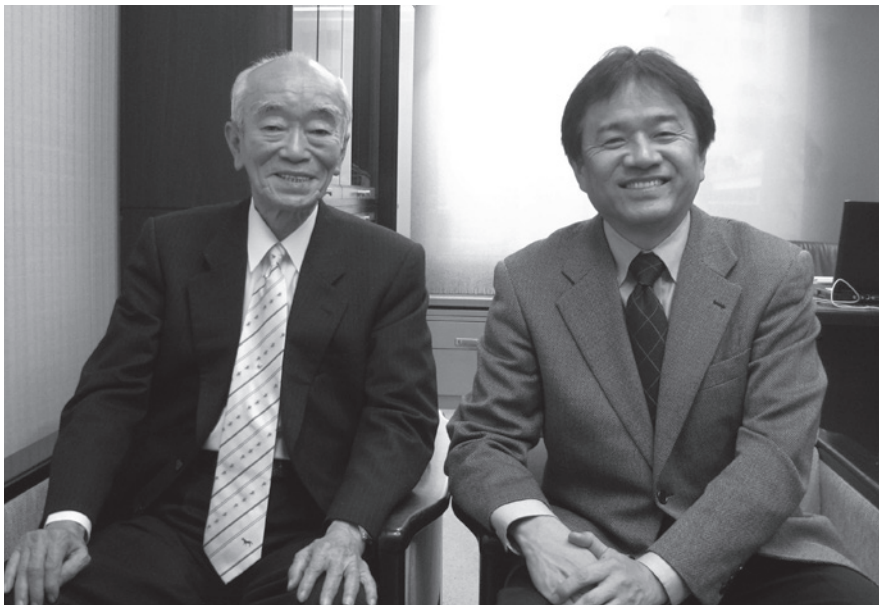
大林　協会も卒業生の集団が一所懸命支えて，これだけ大きくなった．今，施設数，病床数はどのくらいになりましたか？

山田　施設は52施設．病床数は５千床を超えています．

大林　では医科大学附属病院５つぐらいに相当しますから親元をはるかに超したわけですね．それだけ大きくなるといろいろな批判が出てくるものです．しかし，そういった批判を乗り越えて協会本来の目的に沿って，各地域で細かい親切な地域医療を続けていくことが一番だと思います．もう一つは，やはり今言われたように大学との密接な関係が大切です．春には学長交代があり新たな新学長のもと教育・研究・診療を扱われることになるわけですから，新学長ともいろいろご相談をして，今後も協会と自治医大でいい関係を続けていただければと思います．

山田　ありがとうございます．

最後になりましたが，月刊地域医学の読者は今もへき地や離島で頑張っている卒業生が多いのでエールの一言をいただけたらと思います．

大林　地域で働いて活躍されている先生方は，自治医科大学の卒業生だという矜持を持って，今後も行政との強い絆を保ちながら地域から深い，厚い信頼をいただけるようにぜひ頑張ってください．

山田　今日のお話はとても励みになりました．お忙しい中本当にありがとうございました．